



アジア系で初めて米NSA局長になったポール・ナカソネ氏
(写真提供/共同通信)

米軍と沖縄移民の絆 ナカソネ大将

惠隆之介
ジャーナリスト



米国史上初の人事

現在、ネットやコンピュータ上で行われる「サイバー戦」という新種の戦闘が起きている。いまや「サイバー空間を制する者が世界を制する」と言っても過言ではない。

二〇一六年、米大統領選に際し、ロシアはサイバー攻撃（攻勢）をかけたばかりでなく、イギリスのEU離脱に関する国民投票にもネットを使って世論誘導した疑いがある。

さらに、クリミアを併合したロシアがウクライナ東部を侵略した際、サイバー攻撃を仕掛けた。結果、ウクライナは軍事施設のみならず、発電、交通などの社会インフラが制御不能に陥り、ロシア軍に対抗できなかった。

北朝鮮も、世界各地の銀行に組織的なサイバー攻撃をかけている。二〇一七年には、バングラデシュ中央銀行から八千万ドル（約九十二億円）を奪っているのだ。

このような情勢下、米国防総省は今年五月四日、ポール・M・ナカソネ米陸軍中将（五十四歳）を大将に進級させるとともに、国家安全保障局（NSA）局長兼サイバー軍司令官兼中央安全委員会長官に任命した。NSAは情報収集を担当し、サイバー軍は同空間で攻撃防御を実施する組織だ。

NSAは米国最大規模の情報機関で、CIAよりも大きな組織だ。ワシントン近郊のメリーランド州に本

部を持ち、世界各地に拠点を置いている。職員は民間人、軍人ハッカー、分析官を含めると三万八千人、さらに契約支援者一万七千人を数える。

一方、国防総省は、サイバー軍を戦略軍指揮下から独立させて太平洋軍、欧州軍などの統合軍に格上げ。

ナカソネ大将には万一、大統領が執務困難に陥った際、国家指揮を担う権限の順位が付与された。

ナカソネ大将の漢字名は「仲宗根」。大将の祖父、仲宗根松吉と祖母は沖縄県中頭郡美里村（現在の沖縄市）出身。大将は移民三世だ。米国防史上、国家戦略の中核を担う情報機関にアジア系米国人が就任することは初めてのことであり、沖縄にとっては慶事である。

能力の高さは折り紙つき

ナカソネ大将は米中西部ミネソタ州生まれ。三十年前にROTC（予備役将校訓練団）をもってセント・ジョーンズ大学卒業、陸軍少尉に任官し、サイバー戦専門将校のコースを歩んだ。これまでに数々の実績を残している。

軍事情報大隊指揮官時代、二〇〇二年から〇四年の間、イラクおよびアフガニスタンで作戦行動する部隊支援のため、電子情報収集に従事している。なお、軍事情報大隊はNSA隷下で、フォートゴードン陸軍基地に所在する。

二〇〇七年から一〇年までの三年間は、同じくNSA隷下の戦闘部隊をイラクおよびアフガニスタンに派遣運用する指揮官も務めている。いずれの場面でも、ナカソネ大将のかつての上司たちは、その能力と部下のやる気を掻き立てる統率力を絶賛している（ワシントンポスト）二〇一八年四月一日。

とくにIS（イスラム国）討伐を目指した「グローピング・シンフォニー作戦」では、サイバー戦を任務とする統合任務部隊（Arise）指揮官

として活躍し、特殊作戦部隊、諜報機関、同盟国と協同して、サイバー攻勢を阻止、壊滅に追いやった。

二〇一二年には、イランが米国の金融システムに対して仕掛けたサイバー攻撃（インターネット回線を切断、麻痺させる「D.O.S攻撃」）を撃退している。

ナカソネ大将の能力の高さは折り紙つきだ。前任のNSA局長兼サイバー軍司令官だったマイケル・ロジャーズ提督は五月四日、メリーランド州フォート・ミードで行われた交代式で、ナカソネ大将の実力、業績を称賛する内容のスピーチを、なんとメモなしで十分以上にわたって行った。ロジャーズ提督はスピーチのなかで、ナカソネ大将を支える家族にも賛辞を贈っている。

アシュトン・カーター国防長官（オバマ政権当時）の国防次官補で、サ

エドウィンが属したMISL部隊の要員は、語学学校MISLS (MIS Language School) で情報員として育成された。そのMISLSの前身は一九四一年十一月、真珠湾攻撃の五週間前、サンフランシスコ・プレシデオ内に開設された。四名の日系人教官と六十名の生徒で構成され、米軍情報課（MID）および参謀第二部の指揮下に置かれた。

MISLSの授業では、情報員としての基礎知識、日本語の読み書き、会話、草書の読み方や、日本軍教範であった『作戦要務令』や『応用戦術』を使って軍隊用語の理解、さらには日本の地理・歴史・文化といった科目を教育された。前線における日本軍捕虜の尋問のために必要な基礎知識を習得するためであり、六カ月という短期間で集中的に教え込まれた。

イバー戦関連の高位責任者であったエリック・ローゼンバック氏は、ナカソネ大将が同組織の司令官に内定したとき、こう絶賛した。

「組織に実力を与え、最も効果をもたらす将軍である」

かつて同僚だったある空軍士官も、ナカソネ大将についてこう語っている。

「これまで、すべての重要な戦い（サイバー戦）に勝利してきた。彼は部下を批判したことがなかったばかりか、温厚で非常に忍耐強く、協調性がある」

ナカソネ大将のルーツ

ナカソネ大将のルーツを辿ってみよう。

祖父、松吉は一九一三年（大正二年）、沖縄からハワイに移民。十四年後の一九二七年（昭和二年）、父エド

MISLSは終戦までに約六千人の卒業生を輩出、現在はカリフォルニア州モントレーに所在する米国防総省外国語学校に引き継がれている。

当時の卒業生たちは、情報員として日本軍の通信傍受、作戦資料英訳、捕虜尋問、非戦闘員を含む日本軍への投降勧告などに従事した。

情報員は通常、前線に出ないが、MISは沖縄、サイパン等の地上戦において避難壕を巡回し、投降勧告を行っている。その際、日本軍兵士によって射殺されたり、砲爆撃に晒されて爆死している。

一九八〇年五月九日、米国防総省は彼らの功績を後世に顕彰するためとして、米国防総省外国語学校のビル三棟に戦死したMIS日系人兵士の名前をそれぞれ冠した。

終戦後は日本本土、沖縄で通訳としてGHQの占領政策および米国民

ウィン・ナカソネが生まれる。エドウィンは現在九十一歳。五月四日の交代式には夫人とともに参列している。

エドウィンは一九四一年十二月七日午前七時五十五分頃（現地時間）、帝国海軍航空隊によって開始された真珠湾攻撃を自宅の台所の窓から偶然目撃し、衝撃を受けている。

以降、彼ら移民日系二世は、日本と米国という二つの祖国を背負いながら懸命に生きることになる。

第二次世界大戦において、エドウィンは終戦の直前に米陸軍情報部（MIS）に入隊（当時十八歳）。戦後の一九四七年からは在京のGHQ総司令部に約二年間、通訳将校として勤務。朝鮮戦争にも参戦し、大佐まで昇進している。陸軍退役後は、ミネソタ州の高校と大学で歴史の教員、教授に就任した。

政府の窓口として活動しながら、日本共産党の監視、とりわけシベリア抑留者帰還に伴う共産主義思想の浸透工作の分析にあたっている。

彼らは「人間秘密兵器」と呼ばれ、山本五十六連合艦隊司令長官機撃墜事案に関する通信傍受や、マリアナ沖航空戦の作戦資料読解などで力を発揮した。米国のある戦略家は、彼らの功績をこう評価した。

「彼らによって、対日戦は予定より二年早く終結した」

肩身が狭かった沖縄移民

日系人を語るうえで、第442連隊、第100歩兵大隊について触れないわけにはいかない。

一九四二年六月、在ハワイの日系二世陸軍将兵一千四百名を中心に、ウィスコンシン州のキャンプ・マッコイで第100歩兵大隊が編制された。

一九四三年一月二十八日には、米本土在住の日系人強制収容所において志願兵の募集が開始され、第42連隊が編制された。

ハワイと米本土における日系人の徴兵年齢人口（十八―三十九歳の男性）は、前者約二万三千人、後者は約二万五千人でほとんど同じだったが、入隊希望者はハワイが圧倒的に多く、募集定員一千五百人に対し六倍以上の志願者が殺到。ハワイから二千六百人、米本土から八百人の志願兵が入隊してきた。とくに希望者には沖縄移民二世が多かった。

なぜ沖縄移民二世の希望者が多かったか？ 戦前、沖縄移民一世は、移民先で他県出身者と齟齬をきたすことが多々あり、肩身の狭い思いをしていた。沖縄では廃藩置県以降も一般県民が学問を軽視したため就学率、労働生産性が低迷していた。ま

た、県内では日本の古語を多く残した沖縄方言が常用されていたため、移民先では他県出身者とのコミュニケーションが不十分であった。

一九〇九年（明治四十二年）、移民初期時代のハワイの状況を、移民一世の宮城伊栄はこう証言している。

「日本人社会は如何なる態度をとったかと言うと、彼らはいたって冷酷で、事毎に我らを軽蔑し、沖縄沖縄と呼び捨てにしていたので、我々県人はさながら海洋に浮かぶ舵無き棄て小舟同然で一層旅の悲哀を深くし、煩悶し前途を悲観せざるを得なかった。従って作業場に於いても事毎に摩擦を生じ、仔細な事より一大不祥事を起こした例は各地到る所に見受けられた。翻って我々県人自体を観察するに恥ずべき欠点もあった」（『おきなわ』一九五一年第二巻第三号）

大正後半以降、沖縄移民一世たちは反省し、郷里に送金して教育レベルの向上に努め、移民会館を建設。移民予定の青年を合宿形式で鍛え、驍や標準語の教育を徹底させている。

そんな肩身の狭い思いをしていた沖縄移民を奮起させる出来事が起こる。一九〇九年、帝国海軍練習艦隊「宗谷」「阿蘇」の二艦がハワイに寄港する。旗艦「宗谷」航海長兼指導教官は、本誌二〇一八年六月号でも紹介した沖縄出身の漢那憲和（当時三十二歳）海軍大尉であった。漢那は一九二二年（大正十年）、昭和天皇が皇太子の時代の欧州外遊時に、御召艦「香取」の艦長に抜擢された人物だ。

騒動になった漢那の発言

一九〇九年、初めて漢那がハワイに來た時の感動を、宮城はこう記し

ている。

「漢那大尉の御來航は茨の途をさまよっていた我々沖縄県人に勇氣と希望を与えてくれた事として我々は永久に忘れることは出来ない。

当時、日本人社会より侮辱されていた県人にとっては真に干天に慈雨の感がした。ハワイ・ヒロ市に於いては島内の県人はほとんどくまなく集まって一大歓迎会を催し、日頃のうっ憤を晴らして大気焔を上げたのである。

この事あって以来、日本人社会の態度は手の平を返すが如く一変し、我らに対し日本人同等の待遇をするようになって来た（同前）

その漢那は、一九二五年（大正十四年）、海軍少将で予備役となった。一九二八年（昭和三年）、第十六回衆議院議員選挙に挑戦、沖縄地方区最

高位で当選した。

その後、漢那は一九三〇年（昭和五年）六月にハワイを訪問し、日系人を対象に講演を行った。

当時、米本土では日系二世が日本派と米国派に分裂し、傷害事件さえ起きていた。それだけ日系二世のアイデンティティは揺れ動いていたのだ。その講演の終わりに、一人の日系二世が挙手して質問した。

「閣下、もし将来、日米戦が生起するようなことがありますならば、我々日系人はいったい日米いずれの国に尽くしたらいいのでしょうか？」

聴衆のほとんどは「日本」と答えるだろうと思っていた。移民一世の多くはそれを期待していた。

ところが、漢那の答えは異なった。「君たちの祖国は米国であります。当然、米国に忠誠を尽くすべきです」

場内は騒然となった。とくに、移民一世のなかには憤慨する者も少なくなかった。この発言は、漢那が帰国するより早く日本に達し、在京の沖縄県人会は漢那を激しく批判した。また、海軍退役将官会「洋洋会」でも、この発言は物議を醸していた。しかし、漢那は翌一九三一年もハワイを訪問しており、同様の趣旨で講演を行っている。

第100歩兵大隊への志願兵に在ハワイの日系二世、とりわけ沖縄移民二世が多かった理由はここにある。沖縄の英雄・漢那の発言によって、沖縄移民二世たちは忠義を尽くすべき「祖国」を自覚したのだ。

二世部隊将兵は戦後、米軍将校として日本に進駐した。その彼らが次々と在京の漢那を表敬訪問している。そればかりか公職追放令、軍人恩給

停止令を受けて困窮する漢那とその家族を支援した。

なお、漢那は一九五〇年（昭和二十五年）七月二十九日、七十二歳で死去するが、ハワイでは追悼式が各地で行われた。移民一世は仏教式で、二世たちはキリスト教式でその死を悼んだのである。

差別との闘い

話を戻そう。

第100歩兵大隊は欧州戦線に投入された。一九四三年九月二十九日、イタリアでドイツ軍と交戦。その後、一九四四年六月、第100歩兵大隊は第442連隊に編入後、九月にはフランスへ移動、第36師団に編入された。

同年十月二十四日、第34師団141連隊第一大隊、通称「テキサス大隊」がドイツ軍に包囲され、全滅寸

前に陥った。翌二十五日、第442連隊はルーズヴェルト大統領から直々に救出命令を受ける。

同連隊は十月三十日、ドイツ軍との激戦の末、ついに「テキサス大隊」生存将兵二百十一人の救出に成功する。しかし、代償も大きかった。第442連隊は二百十六人が戦死、六百人以上が重傷を負った。

第442連隊は第36師団編入時には兵力二千八百名を数えていたが、三カ月が経った十一月には半分の一千四百人までに減少していた。

第442連隊の元戦士は、戦後こう語っている。

「部隊から一人の脱走者も出さなかった。それどころか、野戦病院へ搬送された仲間が命令を無視して部隊に独断で復帰したこともあった」

第442連隊のアメリカに対する忠誠心は、それだけ凄まじかったの

である。

日系部隊は、敵軍だけでなく差別や偏見とも戦っていた。救出されたテキサス大隊の白人少佐がこう言った。

「なんだ、ジャップ部隊か！」

これを聞いた日系少尉は激怒。少佐に詰め寄った。

「何を言われるのですか。俺たちはれっきとした『米陸軍』第442連隊です。言い直して下さい！」

少佐はすぐに謝罪し、敬礼したという。

一九四六年、トルーマン大統領は米陸軍中最高の殊勲をあげた第442連隊を評してこう称えている。

「諸君は敵のみならず、人種差別という偏見とも戦い勝利した」

ナカソネ大將が陸軍を志願したのも、「高校生の時、第442連隊の活躍を学んだことが動機だった」と語っ

ている（二〇一八年三月二日『ハワイ・ヘラルド』）。

現在、米陸軍では第442連隊の戦闘記録がテキストとして必修科目になっているのだ。

今日の地位を築いたもの

一九八六年一月二十八日、スペースシャトル「チャレンジャー」の爆発事故で殉職した日系人初の宇宙飛行士、日系三世エリソン・オニヅカ米空軍大佐が搭乗員に選出される直前、NASAは調査官を彼が青年期を過ごしたハワイ州コナに送って身辺調査を行っている。その際、最も重視されたのが、米国家に対する忠誠心であった。

オニヅカ大佐はその動きを知ったとき、友人にこう語っていたという。

「私の希望が叶って宇宙飛行士に任

命されたとしたら、第442連隊、第100大隊が果たした国家への忠誠と貢献のお陰だ」

二〇一一年十一月二日、米国議会は、米国最高勲章にあたる議会名誉

黄金勲章（Congressional Gold Medal）を第二次世界大戦時に活躍した二つの日系二世部隊、米陸軍442連隊、第100大隊と、父エドウィンが属したMISに贈った。今日の在米日系人への信頼を不動のものにしたのは、この二つの部隊の功績が大きい。

米陸軍442連隊、第100大隊はすでに有名だったが、MISは任務の性質上、戦後になっても長く秘匿された。一九七二年、ニクソン大統領が第二次世界大戦中の軍事情報

の機密扱いを解除する大統領令11652に署名して以降、ようやく公表されたのである。

先述した漢那も、今回のナカソネ大將の栄進を泉下から、さぞや喜んでいることであろう。

めぐみりゅうのすけ

一九五四年、沖縄コザ市生まれ。七八年、防衛大学校管理専攻コースを卒業。海上自衛隊幹部候補生学校（江田島）、世界一周遠洋航海を経て護衛艦隊勤務。八二年、退官。その後、琉球銀行勤務。九九年、退職。以降、ジャーナリズム活動に専念。シンクタンク「沖縄・失関を守る実行委員会」代表。著書に「迫りくる沖縄危機（幻冬舎ルネサンス新書）など。